

会員の皆様へ：年会費納入の情報：郵便封筒の宛名下の数字参照。2021 は 2021 年度まで納入済み。

しのばず自然観察会より 2021-10 2021.10.02

2021 年 10月の活動 不忍池定点観察

集合：2021年10月14日（日）午前10時 不忍池蓮池南西端 緑の小旗あり
（野外ステージ西側、湯島天神下交差点寄り） 今回は雨天中止

*新型コロナウイルス感染状況によっては中止の可能性があります。

しのばず自然観察会のホームページでも確認してください。

持物：筆記用具、双眼鏡、雨具 or 日傘 飲み物、マスク、敷物（必要な方は昼食）
解散は午後1時頃ボート池畔または藤棚



国内の新型コロナウイルス感染者数は7~8月の爆発的に増加のあと、ようやく減少して緊急事態宣言が解除されました。一方で、台東区内には宣言下で夜通し酒類を提供してきたお店もあり、次の感染拡大への対策を今のうちにとるのかが政府や地方行政に問われます。私たちは、これで気を緩めることなく、感染防止対策を続けましょう。

外出自粛のうちに、今年も夏が過ぎてしまい、不忍池にも渡り鳥が飛来し始めました。まだ、ハスが茂ったところでは確認が難しいのですが、数十年前に比べると少し遅くなっている気がします。

9月の不忍池定点観察から

9月19日（日）の観察会は、夜来の大雨もあがって台風一過の晴天に恵まれ、9名が参加しました。いつものように蓮池外周園路をまわり、ボート池西のテラスまでゆくりと歩きました。予期しないことには、ハスの最後の一輪？が見事に咲いていました。

蓮池ではちょうど、京成電鉄上野駅の線路トンネルおよび上野公園に埋設してある非常用地下貯水タンクからの排水が地下配水管から流れ込んでいるのが見られました。

毎日のように早朝の上野公園を歩いている植竹会員から、蓮池の園路は朝のごみ収集

しのばず自然観察会 事務局 〒110-0001 台東区谷中3-1-9 小川潔 方
1975年創立 電話 03-3828-8775 URL: <http://sinobazu.extrem.ne.jp>
郵便振替 00100-8-84609 しのばず自然観察会 年会費 2,000円 ほかに行事参加費

2020年以前の会費未納の方もお忘れなく！退会の場合は早めに葉書で事務局へ。

があるまで、ごみが散乱してひどいよと紹介がありました。ごみの由来は、ひとつは周辺住民が持ってきて捨てていく家庭ごみの山、もう一つは夜から早朝に園路で飲み食いした弁当柄と空き缶。昼間の来園者には気づかれない、ごみをめぐる公園行政と市民とのいたちごっこ。言い換えれば、ボランティアや行政によるごみ収集の努力で、昼間はかろうじて公園の面目が保たれていることが浮き彫りになりました。

鳥：カワウ、カルガモ、カイツブリ（声だけ）、スズメ、ハシブトガラス、ドバト

爬虫類：ミシシッピーアカミミガメ、イシガメ？（クサガメとの雑種？）

魚：コイ、ブルーギルの稚魚？（上から見ると細長い小魚です。ムツゴ（クチボソ）かも知れませんが。横から見る事ができれば、ブルーギルは平べったいので識別できるのですが）

昆虫：ナミアゲハ、アオスジアゲハ、ヤマトシジミ、イチモンジセセリ、コオロギ類（種類不詳）、オンブバッタ、ウスバキトンボ、シオカラトンボ、コフキトンボ、アジアイトトンボ、ミンミンゼミ（声だけ。8月末から涼しい日が続いて、セミの鳴き声ともすっきりご無沙汰でした。例年なら、アブラゼミは10月まで聞こえるのですが。）

花：カタバミ、ハス（植栽）、ミソハギ（植栽）、アベリア（植栽）、ヤブガラシ、ツユクサ

出穂済：ススキ（植栽？・結実中）、アシ（結実中）、ガマ（植栽・結実中）、マコモ（植栽・開花中）



ススキ



ミソハギ



マコモ



ハス



ヤブカラシとアオスジアゲハ



イシガメ？雑種？

7月のカメ 追記 小川千恵子

2021年7月11日(日)観察会が終わったあとで見た亀の産卵について、私が見たこととちょっと調べたことを書きます。

午後1時少し前、ちょうど昼食が終わった頃に、田代さんが「カメが産卵している」とお知らせ下さり、早速ボート池と蓮池の間の通路に行く。弁天堂に向かって左側桜の木の根元に、甲羅15~6cm×12~3cm(目測)のクサガメがいた。「しのばず自然観察会より」2021-8、P3の写真のように北向きに前足をふんばって、後足を動かしていた。後足のすぐ後には亀から見て、横15cm×奥行10cm位の穴があいていて、主に左足で彫り上げたであろう黒土が左後方に盛り上がっていた(2021-8、P3の写真を見て下さい)。

亀は①右後足を長く伸ばして穴に入れ、土をほんの少し穴の右側にかき出すというのを二度程すると、次は左後足で同様に左横にかき出し、②右後足を伸ばして穴に入れてもそもそ上下に動かして、土は出さずに戻し、つぎに左後足も同様にする。この①②を何度も40分以上繰り返した。

そのあと亀は後足で土を戻し始めたが、右足を伸ばして地面の表面をなでるようにかくように穴の方へ動かすのだが、そこには余り土はない。左足でもするが初めはうまく土が入らない。まるで空振りしているみたい。何度か交互に繰り返したあとで、シャベルを横にして一挙に土を穴に入れるみたいに、左足をガーッと伸ばしてザザーッと土を穴に入れた。3~4回で、左後方の盛り土は穴におさまった。

そして私たちが手で上からトントンと叩いて抑えることをするように、亀は左右の後足で右右、左左、というようにトントン土の上を叩いて土を抑えた。これで終わりか?と思ったら今度はそばにあった枯れ枝等をまた後足で交互にあつという間にかき寄せ土の上にのせた。この間一度もふり返って自分の眼で穴の状態等を確認することなく済ませ、あとを振り向きもせずにボート池へドボーン!

午後2時になっていた。以上が私が見たことでした。

ちょうど最後まで見ていた女性がスマホで調べてくれました。

クサガメは夜半か明け方に産卵することが多く昼間の産卵は珍しい、一度に1~14個、卵の大きさは4.5×2.5cm、年に2~3回。

産卵の頻度や卵の大きさ、数は産む亀の大きさ(年齢)によって異なると思います。

しのばず自然観察会の会員でもある中山れい子さんが関わった本「カメちゃんおいで、手の鳴るほうへ」中村養吉文 アトリエ・モレリ絵、解説、講談社2002年によると、P68「日当たりの良い場所、人があまり踏み込まない土のやわらかい所」に産む。「交尾をすると1~3か月で産卵する。1年以上たって産卵するカメもいる」「卵は土の中で1か月半~2か月くらいで孵化する」「カメは産(ママ)まれるときの温度によってオス、メスが決まる。1か月くらい土の中ですごし、お腹に残った卵黄の栄養で生きている」

とあります。

見物人が去って田代さんもお帰りになったあと、トントンと後足で叩いたあの土がどの位固いのか？本当に卵はあるのか？いくつあるのか？どんな風に並んでいるのか？等興味があつて確かめたかったのですが、亀のようすに圧倒されたせいか、実際にやってみる気にはなれませんでした。

もしかしたら、もう二度とこういうチャンスには会えないかも知れませんがー。

9月19日の観察会では産卵場所には何の変化も見付けられませんでした。

なお、9月19日の観察会で、イシガメ？クサガメ？と迷った亀がいました。

上述の本によると「交雑種のウンキョウ」というのがいるそうです (P87)。「今は交雑種は珍しいが昔は結構いた」と書かれています。あの亀はいったい何だったのでしょうか？

卵や種子についての補足

動物の卵や植物の種子は一般に、同一種類内では大きさ（重さ）がほぼ一定で、親の栄養状態によって数が違ってきます。親が持っている栄養資源を子に引き継ぐとき、どの1個の卵や種子が生き残ったとしても、正常なおとなになれるようにという戦略です。小さい卵や種子は生き残るのが難しいからです。ところで、小川千恵子さんはサケの卵に大小があるのを見ていると言います。この小さな卵の運命や如何に？

ところで、タンポポの綿毛が開く頃の頭状花では、こげ茶色に熟した実（種子）のほかに、薄っぺらで白く中身が抜けているものや、成熟したものと同様に見えますが中身が抜けていて軽いものが混ざっていることがあります。これらの不稔種子は、未受精のものや、親の栄養状態が十分でないため栄養の配分にあずかれなかったもののように見えます。タンポポではどういうメカニズムで子孫への栄養の配分が行われるのかはわかりませんが、動植物によっては親によって産み分けという調節が行われているとも聞きます。また、魚のタイや植物のテンナンショウのように、栄養状態（年齢）によってオス、メスが決まる生物もあります。オス、または精子の方が、メスまたは卵子より栄養配分（投資）が少なくて済むので、小型（若い）の個体がオスになります。

植物のなかには種子に2型を持つものがあります。秋の七草として親しまれてきたクズは、硬軟2種類の種子を同じ莢の中につくります。種子が持つ栄養は同じなのですが、皮に硬軟があります。軟らかい皮の種子は水を容易に吸ってすぐに発芽できますが、硬い皮の種子は水を吸いにくく、なかなか発芽しません。それで、硬い皮の種子が土の中に長く残ることになります。この硬い皮の種子は、たとえば土が掘り返されたときなどに、皮に傷がつくとそこから給水して発芽します。軟らかい皮の種子が発芽した後に、他の植物の繁茂や草むしりに会って全滅しても、硬い皮の種子を残しておいて、環境が変わった時に生育して生き残るという戦略です。ちょうど保険をかけているようなものですね。

(小川潔)